

医療と臨床心理学のケアをつなぐナラティブ・アプローチ

大動脈瘤を抱える患者の意味世界への接近

Narrative approach as a bridge to connecting medical care and clinical psychological care

中川 恵

Megumi NAKAGAWA

立命館大学大学院 応用人間科学研究科 臨床心理学領域

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Master's Program in Clinical Psychology

Key words:患者, 臨床心理学, 医療

目的

本研究は、臨床心理学的視点から患者の語りを聴き取る当事者体験の研究として位置づけられる。大動脈瘤を抱える患者への個別インタビューと診察場面での様子を通して臨床心理学的に考察し、当事者の心理的体験過程を明らかにすることが目的である。身体疾患を持ちながら人生を過ごす当事者の体験に寄り添いケアを行うことは、臨床心理学が目指すケアの在り方と重なっており、医学および医療人類学と臨床心理学を架橋する重要な領域である (Kleinman・皆藤, 2016)。本研究は患者と家族の生活文脈を重視し、医療専門家たちによる疾患 (disease) への対処からは見えてこない患者当事者の病 (illness) のありかたを探求する研究を目指す。病気にかかわる個人の体験を語り聴くことを通じて、生活の中で病気がどのような意味を持つかを明らかにする。鈴木 (2012) が示唆するように、インタビューの主眼は、患者の経歴・病歴についての網羅的な情報を得ることではなく、それぞれの人が生きてきた時間の流れの中で起こる体験の特殊性や固有の問題をつかみ取ることにあり、そのための方法としてナラティブ・アプローチ (森岡, 2015) を用いる。

今日、悪性腫瘍などの予後不良の疾患を抱えた患者には、臨床心理士が中心となり患者、家族への心理的サポートが行われており、このような領域での患者と家族への支援への必要性はおおむね認知されている。対して、すぐには致命的となることのない良性疾患をもつ患者に対しては、慢性的なストレスを抱えていたとしても臨床心理士からの心理的サポートが十分に行き届いていないという実態がある。本研究では大動脈瘤という、良性疾患ではあるが、高い致死への恐怖、病気を抱えながら生き続ける上で生じる心理的負担があると想像されるにもかかわらず、これまで心理的支援の対象としてはあまり考えてこられなかった疾患をとりあげ、研究の対象とした。本研究ではこのような姿勢を重視し、当事者への丁寧なインタビューによって当事者の語りを聴き取り、それを深く理解し、描写することによって得られる「臨床の知」を、医療と臨床心理学の現場において共有し、意味のあるケアの実践の改善に資することを目的とする。

方法

胸部あるいは腹部大動脈瘤の診断を受け、治療を経験し、経過観察されている成人2~3名を対象者とする。治療法選択への影響や侵襲性を考慮し、治療や診察を経るなどして安定している状況にある人にご協力いただく。外来診察のアルバイトを行っている病院の循環器内科に

おいて、大動脈瘤治療を専門とする医師に研究協力の許可を得ている。

研究協力者に対しては半構造化インタビューを実施。診断時からの時間経過をもった病体験のプロセスを聞き取る。

* 「体験の特殊性」を明らかにするために関わってくる調査内容

1	病気が発覚する前の生活はどの様であったか
2	診断を受けた時の心境
3	治療を待つ期間の期待・不安
4	治療そのものに対する考え
5	家族に対する感情、家族への説明
6	(病院での出来事や医療者との関係)
7	治療等経過を経ての心境
8	生活を維持する意識へ発展する過程

分析方法については、インタビューから得られた患者の語りをきめ細かく抽出するために最適な方法を選択する。とくにエピソードや、出来事のシーケンスにかかわる分析を重視したい。

結果

現段階は、80代の男性一人とその配偶者にインタビューした。救急搬送され入院を経験した出来事、命を救われたと感じる医師への信頼感、病気を体験するまでの仕事生活、退院後も突然死がやってくる可能性を危惧しての生活習慣の見直しなどについて語られた。また、大動脈瘤を切り口にして他に経験した病気についての語りも聴かれた。配偶者からも同様に、医師への感謝や家族としての心配、気概などについても語られた。今後さらにインタビューを行う予定。

考察

大動脈瘤ならではの病の語りとして、突然死が訪れる可能性への不安があると思われる。また、治療を行った医師との関係、病気を通してみえる家族の在り方 (変化等) も、一つの病の語りから表れる重要事項である。

主な引用文献

- Kleinman, A. (1988) The Illness Narratives. Basic Books : 江口重幸・五木田紳・上野豪志(訳) (1996): 『病いの語り』 誠信書房
Kleinman, A. (著), 皆藤章 (編著) (2016) : ケアすることの意味-病む人とともに在ることの心理学と医療人類学
鈴木智之 (2012) : 滞る時間/動きだす時間-先天性心疾患とともに生きる人々の“転機”の語りを聞くということ. 質的心理学研究第11号-11, 45-62
森岡正芳 (2015) : 臨床ナラティブアプローチ, ミネルヴァ書房.